国際貢献パワーおかやまは動く

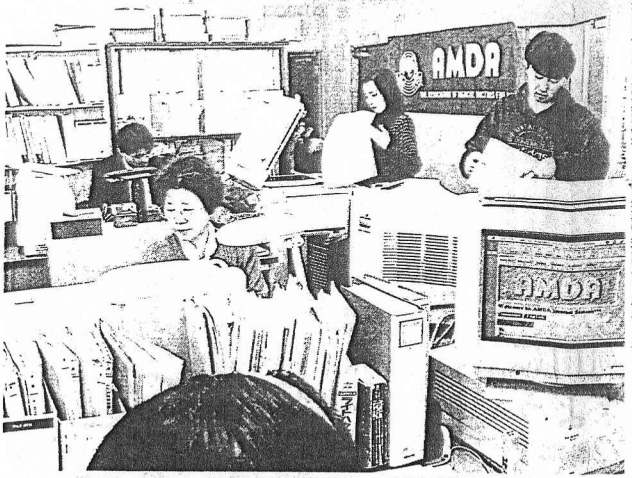
アジア医師連絡協議会
AMDAからの報告

シリーズ企画 No.5

岡山市榎津に本部を置くAMDA（アジア医師連絡協議会＝代表・菅波茂、国際的な人道援助団体として、その名は全世界に知られている。世界の人々の幸せのため自分たちが求められるなら、どこへでも即座に出掛けていく、と指すAMDA加盟の医師や看護婦、ボランティアたち。これまでにAMDAの救援活動で救われた世界の被災民は数え切れない。「今日もまた世界のどこかで自分たちの救援を待つ人がいるのでは」―そんな気持ちでボランティアに励むAMDAスタッフたち。その姿を浮き彫りにしてみた。

どうして、人が人を…

菅波を駆り立てた一枚の戦争写真



FAX、インターネットで世界の災害状況をキャッチするAMDAのメンバー

ルワンダへ。サハリンへ。民族紛争や自然災害による被災民のいるところへ、自らの生命の保証さえもないところへ飛び込んでいくAMDA救援チームのメンバーたち。そんなAMDAが本格的な緊急救援活動を始めたのは昭和五十九年だった。

AMDA発足の動機となったのは小学校を移ける菅波が高校二年生の夏休みに目にした一枚の写真である。その写真は祖父が大切にしていた「太平洋戦争写真集」に掲載されていたもので、"日本軍の侵攻"、"米軍の反攻"、"日本軍の敗走"の三部作とは、なんと自分とそれほど年齢が違わないと思われる日本人兵士が海岸の浅瀬に半分顔を突っ込んだ形で死んでいる姿が写されているではないか。

写真に付随している説明によれば太平洋戦争で日本軍は約五十万人の兵士をアジア地域に派遣し、その多くが戦死したとのこと。写真の兵士はニューギニア島に駐屯して連合軍の上陸阻止作戦に参戦、戦死したのだとか。

浜辺での、あまりにも無残な戦死。それにもかかわらず穏やかな表情をたたえたその兵士の顔に菅波は震えるほどのショックを受け、しばらくは身動きもできなかったという。その時の衝撃を著書『遥かなる夢―国際医療貢献と地域おこし』の中で次のような表現で述懐している。

「あの兵士の死は太平洋戦争全体からすれば多数の戦死者の中の一人だったかも知れない。しかし、私にとっては人の死がこれほど身近に、無残に感じられたことはなく、ただ呆然と立ち尽くすばかり。その時のことで覚えているのは、ただうるさいほどに鳴き叫ぶセミの声だけだった。」

＊＊＊

「なぜ、人々は同じ人間でありながら憎み合い殺し合うのか」。「人はすべて平等に生き、幸せを享受する権利を持っているはず」。そんなことを考えた菅波は岡山大学医学部に進学すると、四年生の夏休みに八カ月の休暇をとって放浪の旅に出た。

救援チーム派遣が決まるとボランティアたちは医薬品などの手配に追いまくられる

舞台となって大勢の戦死者を出したアジアを自分の目で確かめたかったからだ。

ところが、旅先で菅波が目にしたのは貧困に悩む人々や、戦乱に悩む人たちばかり。「人間は、こんなことばかり繰り返していていいのか」―そんなことを考えた菅波が医学部卒業後、自分にできることとして思い浮かべたのが医療技術を持つ医師仲間に呼び掛けて、せめて医療活動を通じて人々の幸せに貢献することができないだろうかということだった。

緊急救援は約40件

頑張る職員、ボランティア

菅波のこの考えは当時、医師たちの間で大きな反響を呼ぶとともに協力を申し出る者が続々集まった。今もその数は増えており、四月現在のAMDA加盟会員は約十万国で医師二百四人、一般会員五百五十一人、学生七十四人、賛助会員二百五十六人、法人会員二十七人に。

一方、これまでにAMDAが行った緊急救援プロジェクトは「エチオピアチグレ州難民医療支援プロジェクト」「ソマリア難民救援プロジェクト」など四十件近くに達しているが、これらのうち「モザンビーク・ガザ州帰還難民緊急救援医療プロジェクト」「旧ユーゴスラビア救援プロジェクト」など九件は今も救援活動を続行中なのだ。

…が、それほど活発な救援活動をしているAMDAの本部の職員は決して十分なものではない。スタッフは常勤職員五人、十人の非常勤職員。それに自分の余暇時間を奉仕に提供している「日曜ボランティア」約二十数人がいるだけ。

ボランティアの奉仕時間は全くまちまち。お昼からの人、夕方から深夜まで奉仕の人…。しかし、前夜がいくら遅くなっても翌朝には必ず熊かが早めに顔を見せている。夜間に着信したFAX確認のためである。「私たちが眠っている間にも救援を求める知らせが届いているかも知れないから」と常勤職員。

FAXの発信元は多岐にわたる。被災地から直接援助を求めるもの、国連機関から緊急出動の手配を求めるもの。ネットワークを組む世界のNGOからのもの。それらをもとに救援チームの派遣が検討されるが、派遣が決まると本部内は急に忙しくなる。

まず、派遣に応じてくれるAMDA会員の医師、看護婦に連絡する者、交通機関の手配をする者、持参する医薬品の手配をする者、「もう少し人手があったら…」。本部職員の偽りのない本音なのだ。

[AMDAのこれまでの主な活動]

年月	活動の内容
1984 12	・第1回 AMDAビジネスミーティング開催（インド、タイ）
1988 12	・インド連邦カルナタカ州無医地区巡回診療プロジェクト開始
1991 4	・ネパール王国ビスヌ村地域医療プロジェクト開始
	・AMDA国際医療情報センター＝在日外国人医療プロジェクト＝活動開始（東京）
	・イラン国内クルド難民救援医療プロジェクト開始
	・ピナツボ火山噴火被災民支援医療プロジェクト開始
1992 3	・エチオピアチグレ州難民医療支援プロジェクト開始
	・バングラデシュ・ミャンマー難民支援医療プロジェクト開始
5	・ネパール国内ブーター難民支援医療プロジェクト開始
7	・カンボジア本国帰還難民支援医療プロジェクト開始
11	・タンコット村眼科医療・母子保健プロジェクト開始
1993 1	・カンボジア精神保健プロジェクト開始
	・ソマリア難民救援チーム活動開始
7	・ネパール・バングラデシュ大洪水被災民緊急救援医療プロジェクト開始
9	・タイ国チェンライ県エイズプロジェクト開始
10	・インド西部大地震被災民緊急救援リハビリテーションプロジェクト開始
12	・AMDA国際医療情報センター関西開設
1994 2	・インドネシア・スマトラ島南部地震救援医療プロジェクト開始
	・モザンビーク・ガザ州帰還難民緊急救援医療プロジェクト開始
3	・旧ユーゴスラビア救援プロジェクト開始
4	・AMDA東京オフィス開設
5	・ルワンダ難民・被災民救援プロジェクト開始
	・ルワンダ国内病院再建プロジェクト開始
	・JICAフィリピン・ターラック州家族計画、母子保健プロジェクト開始
6	・ネパールストリートチルドレン巡回診療プロジェクト開始
12	・ケニアナイロビ地域オフィス開設
1995 1	・阪神・淡路大震災緊急救援プロジェクト開始
3	・JICAザンビア保健医療プロジェクト参加
	・ロシア・チェチェン緊急医療プロジェクト開始
5	・「72時間ネットワーク」設立
	・ロシア・サハリン大地震緊急救援プロジェクト開始
7	・スーダン国内避難民救援プロジェクト開始
	・アンゴラ帰還難民緊急救援プロジェクト開始
9	・朝鮮民主主義共和国緊急救援プロジェクト開始
10	・インドネシア・スマトラ島大震災緊急救援プロジェクト開始
	・メキシコ大震災緊急救援プロジェクト開始
11	・フィリピン台風被害緊急救援プロジェクト開始
1996 2	・中国・雲南州大震災緊急救援プロジェクト開始・
	・中国・四川省雲害緊急救援プロジェクト開始
	・インドネシア・ビアク島大震災緊急救援プロジェクト開始
3	・中国・新疆ウイグル自地区地震緊急救援プロジェクト開始

国際貢献パワー おかやまは動く

アジア医師連絡協議会
AMDAからの報告
シリーズ企画 No.5

AMDAの活躍 広がっていく愛の反響

励ましの声が相次ぐ
私たちも実際に行動を起こそう

この特別企画『国際貢献パワー おかやまは動く』AMDAからの報告」の感想が始まって間のない今年一月、山陽新聞社広告局に一通の手紙が届いた。手紙の主は就実高校一年(当時)の瀬村佑紀さん=米都旭町=である。

「新聞をパラパラとめくっていたら目に止まったのがAMDAの企画でした。『たった五百七十円あれば栄養失調で死んでいる子供たちを救うことができるのに』といった見出しがついたその記事にはルワンダの惨憺な現状が綴られていました。私はかつて世界史の授業で餓死する人の話を聞いたことがありますが、餓死する人の最後は目の玉がポロッとこぼれ落ちるのだそうです。そのことを思うとルワンダの子供たちがかわいそうでなりません。

私と同じ生命を受けながら、食べるものがなくて死んでいく子供たち。私は将来をういった人たちの役に立つ勉強ができる大学へ進もうと思います…これからもAMDAの記事を詳しく取り上げて下さい。人と人が対等に共存できる世界が出来上がることを祈っています」

金森和雄さん=茶田部町作町=からもハガキをいただいた。

「AMDAの企画記事には大きな感動を受けました。現地の写真や記事をもとにした記事はとてもわかりやすく、実感がわいてきます。このシリーズ企画は曜日を決めて継続して掲載して下さい。きっと多くの人に理解されるはずです」

―といったことが書かれていた。

また、中山光子さん=岡山市=からは

「昨年からの一年間は阪神・淡路大震災、地下鉄サリン事件など暗くて、悲しい一ニュースばかりが報道されました。そんな中でうれしいニュースだったのが、AMDAの活躍です。阪神・淡路大震災では被災地に一番に駆け付けて活躍されましたね。その姿を頼もしく拝見させていただきました」

岡山ではAMDAを中心に運合岡山、ライオンズクラブなどで国際貢献の輪が広がっています。AMDAの情報や活躍を新聞などで見るたびに胸が熱くなる思いが強まります。自分のことしか考えていない私を恥ずかしく思っている一人です。AMDAの皆様、お体に気をつけてご活躍下さい。"西のシュネーブ、東のオカヤマ"を目指して。

―と激励の言葉が記されていた。

そして、岡崎久子さん=岡山市=は

「岡山の誇りAMDA。AMDAの目覚ましい活躍を目に、耳にするたびに胸が熱くなる思いが強まります。このシリーズは我々、人間が人間の在り方を考え直させてくれる貴重な企画です。今後も期待しております。私共もじっと挑戦っているだけではいられないと思います」

―と提案をしてくれている。

私たちの活動の様子を紹介して下さる、この企画がスタートして約四カ月間が経ちました。みなさんにAMDAの実態がようやく理解されるようになったのか、最近ではボランティアに来て下さる方が徐々に増えました。また、活動資金を振り込んで下さる方も増加しています。

人道援助大国を目指して私たちは一層頑張ります。これからもどうかよろしく、ご援助下さいますようお願いします。

AMDAに関する問い合わせはTel086・284・7730またはFAX086・284・8999へ。

岡山での開催は全国でも珍しい2回目だ

岡山の活動に注目
外務省がセミナー開催

外務省経済協力局民間援助支援室主催の「民・官・国際協力NGOセミナー」が四月十九日、岡山市で開かれた。政府はこれまで民間団体のNGO(無政府組織)などが行う海外援助事業の支援措置として、もっぱらODA(政府開発援助)の制度を運用してきた。しかし、海外援助事業の活発化に伴って平成元年に「NGO事業補助金制度」の根無債務金協力」の新制度を設立、平成六年度には積極的に業務推進を図るため外務省内に経済協力局民間援助支援室を新設。以後、同室主催で新制度の周知、よりよい運用を図るセミナーを全国で開いている。

岡山市での開催は全国的にも珍しい二回目。外務省によると「岡山はAMDAを中心に地方自治体も海外援助事業を特に活発に行っているため今回の開催になった」とのこと。セミナーでは五月末光弘支援室長が「政府とNGO・地方自治体との連携」について講演。「ICAとNGO・地方自治体との連携」民間から見た政府とNGO・地方自治体との連携」などの説明とパネルディスカッション、平成八年度事業の展望などの説明が行われ、四日本地区から来場の自治体職員、NGO関係者らが熱心に聴講した。

中国雲南省の地震被災者への救援活動は大変喜ばれた(後ろの文字は感謝の言葉)

「AMDAデー」に募金
津山CUP綱引き大会は益金を

三月二十四日。岡山市内の中山小と馬屋下小の児童がAMDA本部を訪れた。中山小は三年前から毎月二十一日、二十二日に募金を募って寄金している。馬屋下小はAMDAメンバーの講演がきっかけ。阪神・淡路大震災で活躍するAMDAメンバーに感激。震災直後に数度の特別募金を寄せるとともに毎月十五日を『AMDAデー』に決めて募金活動をしている。中山小はカンボジアのディケアセンターを、馬屋下小はネパールのストリートチルドレン診療所を直接支援することになった。

四月五日、ノートルダム清心女子大学付属小の始業式。児童たちが集めた十万円がAMDAに手渡された。中国雲南省で三月三日発生した大地震(マグニチュード7)の被災者・故既矣ちゃん(8)に贈ったもの。故ちゃんは地震で両親を失った。大火傷を負い、骨折した故ちゃんは両親の死を知らない。痛みに耐えながら母を呼ぶ故ちゃん。十万円は専門病院での治療費に使われる。

四月初旬。AMDA本部を京阪神と首都圏の五人の男女が訪れ、AMDAの情報を仕入れて帰った。阪神・淡路大震災でボランティア活動の経験を持つ大学生とフリーの青年、女性の二人は救護免許を持ち、ジンバブエで青年海外協力隊として活動の経験を持つ「現地は救急書もなく地面に文字を書いての授業だった。世界の貧しい人々に貢献できればそれが私の生きている証になる」と語った。

もう二人はAMDAがネパールに建設の医療診療所のアシスタントになる。

＊＊＊

津山カップ実行委員会(西本初美委員長)は五月三日、津山市総合体育館で「第三回津山CUP綱引き大会」を行うが、その益金をAMDAに寄贈することにした。同実行委は昨年は阪神・淡路大震災の被災地へ益金(四十一万円)を寄贈しているが、「同じ岡山県内にあって国際貢献に素晴らしい活躍のAMDAに寄贈を」の声が出たため、「AMDAへの寄金は今後も続ける」と同会。

寄金を手渡す中山小、馬屋下小の代表

岡山市の日高春夫さんは六月二十七日、小田郡美星町の中世夢が原で「AMDA活動支援コンサート」を行う。出演アーチストはアフリカン・マエストロのフランシス・ベベイ(カメルーン)ジュスタン・バリ(マダガスカル)アローナ・ニジャエ・ローズ(セネガル)の三人。コンサートの制作費を除いた金額を寄贈することにしてがんばっている。

このシリーズについてのご意見、ご感想を左記へお寄せ下さい。
〒700岡山市柳町二―一―三三、山陽新聞社広告局「アムダ係」